

死に続ける女・葵上

——その機能的側面からのアプローチ——

山 田 利 博

葵上は源氏よりも年上で、その年齢差は四歳である。こう書き出すと、何を今更当然なことをと思うかもしれないが、これはそれほど当然ではない。何故なら、葵上が初めて登場する桐壺巻では、次のように述べられているに過ぎないからである。

① その夜（源氏元服ノ夜、大臣の御里に源氏の君まかでさせたまふ。作法世にめづらしきまでもてかしづききこえたまへり。いとまびはにておはしたるを、ゆゆしうつくしと思ひきこえたまへり。女君は、すこし過ぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなく恥づかしと思いたり。

（二八頁。以下引用は小学館『完本源氏物語』による）

括弧に注を付したように、本当は源氏元服から続く長大な場面の一節である訳だが、そこに葵上の姿はないので省略した。これを見て直ちに理解されることは、二人の年齢差が幾つであるかは何処にも描かれていないということである。それが具体的に表

わされるのは、七巻も後の紅葉賀巻まで待たねばならない。

② 内裏より、大殿にまかでたまへれば、例の、うるはしうよそほしき御さまにて、心うつくしき御気色もなく苦しければ、「今年よりだに、すこし世づきてあらためたまふ御心見えば、いかにうれしからむ」など聞こえたまへど、わざと人すゑてかしたまふと聞きたまひしよりは、やむごとなく思し定めたることにこそはと心のみおかれて、いと疎く恥づかしと思さるべし、しひて見知らぬやうにもてなして、乱れたる御けはひにはえしも心強からず、御答へなどうち聞こえたまへるは、なほ人よりはいとことなり。四年ばかりがこのかみにおはすれば、うちすぐし恥づかしげに、盛りにととのほりて見えたまふ。何ごとかはこの人の飽かぬところはものしたまふ、わが心のあまりけしからぬすさびにかく恨みられたてまつるぞかし、と思し知る。同じ大臣と聞こゆる中にも、おはやむごとなくおはするが、宮腹にひとりいつきかしづきたまふ御心おごりいとこよなくて、すこしもおろかなるをば

めざましと思ひきこえたまへるを、男君は、などかいとさし
もと馴らはいたまふ、御心の隔てどもなるべし。

(一七五—六頁)

最初は書かれていなかったことを選って書くのがこの物語の常であるから、これもそうだと解する向きもあろうが、では何故この場所であればならなかったか。こうした疑問を發したのは別に本稿が初めてという訳ではない。既に藤村潔氏の御論¹⁾があるからである。そこで氏は、これが葵上の父・左大臣と類似することを説かれるのだが、確かにそうした一面があることも否定できないものの、その御意見に全面的には承服できない理由は、葵上についてはもう一つ疑問となる点があるからである。それは、若菜下巻で、出家を望む紫上の気持ちを紛らすために源氏が語った、若き日に会った女人達に関する思い出話の中の次のような一節である。

③「……大将の母君を、幼かりしほどに見そめて、やむことな
くえ避けぬ筋には思ひしを、常に仲よからず、隔てある心地
してやみにしこそ、今思へばいとほしく悔しくもあれ、また、
わが過ちにのみもあらざりけりなど、心ひとつになむ思ひ出
づる。うるはしく重りかにて、そのことの飽かぬかなとおほ
ゆることもなかりき。ただ、いとあまり乱れたるところなく、
すくすくしく、すこしさかしくやいふべかりけむと思ふには
頼もしく、見るにはわずらはしかりし人ざまになむ。……」

(七八七頁)

源氏と葵上との関係を良く知る人にとつては、これもまた特に

目新しいことを語っている訳ではないかもしれない。なのに殊更この部分に心惹かれる理由は、葵上は何故ここまで言われて物の怪となつて出て来ないのだろうなどと夢想してしまうからである。と言うのは、この後引き続き組上に載せられた六条御息所は、周知のように物の怪となつて現れ、しかもその理由の一つとしてこの時の会話を挙げているからなのである。

④「……その中にも、生きての世に、人よりおとして思し棄てしよりも、思ふどちの御物語のついでに、心よからず憎かりしありさまをのたまひ出でたりしなむ、いと恨めしく。今はただ亡きに思しゆるして、他人の言ひおとしめむをだに省き隠したまへとこそ思へとうち思ひしばかりに、かくいみじき身のけはひなれば、かくところせきなり。……」

(若菜下・八〇一頁)

尤も、六条御息所はこの物語で幾度となく物の怪となつて現れているから自ずと話は別だ、彼女は成仏してないのだから仕方ないのだという言い方も或いはできるかもしれない。しかし、それなら葵上は果たして成仏していると言ひ得るのかと言へば、それは多分に危ういのである。と言うのは、妊娠中に死ぬことの罪深さは、宇治の中君によつて語られているからである。

⑤「このなやましきこともいかならんとすらむ。いみじく命短き族なれば、かやうならんついでにもや、はかなくなりなむとすらん」と思ふには、「惜しからねど、悲しくもあり、また、いと罪深くもあなるものを」など、まどろまれぬままに思ひ明かしたまふ。

ただ、言うまでもなく葵上が亡くなったのは妊娠中ではなく、無事夕霧を産み落としてからである。しかし、それは出産後間もなくのことであったし、その死に様は六条御息所の物の怪に取り殺されるといふ、文字通り「横様なる死」であつた訳であるから、彼女が成仏してない可能性というのは、かなりの程度あると思うのである。従つて、先程の問いの答えを、その人物が成仏したか否かなどという相違に安易に求める訳にはいかない。しかも、死後に噂話をされて物の怪となつてゐるのは、この物語の場合、ドロドロした怨念を抱えている者ばかりではない。あの源氏の理想の恋人・藤壺でさえそうなのである。

⑥ 入りたまひても、宮の御事を思ひつつ大殿籠れるに、夢ともなくほのかに見たてまつるを、いみじく恨みたまへる御気色にて、「漏らさじとのたまひしかど、うき名の隠れなかりければ、恥づかしう。苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」とのたまふ。

(朝顔・四五二頁)

但し、ここは源氏の夢うつつの中にその姿が現れたのであるから、厳密に言えば物の怪とは異なるかもしれない。しかし、「いみじく恨みたまへる御気色」或いは、省略してしまつたが、続く部分にある「おそはるる心地して」などの言葉から、極めてそれに近いものという理解は成り立つてであらう。源氏物語の美の規範とも言うべき藤壺でさえこのような有様なのだから、逆に死後に噂されたら物の怪となつて出て来るのがこの物語の論理である

ような氣もしてくるのだが、だとすれば、ますます疑問になるのは、では何故葵上はそうならないかである。既に③の引用文で見たように、彼女は充分に恨みに思つても良いだけの悪口を言われている。にも拘らず、彼女は頑なに物の怪にはならない。何故であろうか。これが、聊か奇妙な本稿の題名の由来である訳だが、最初に年齢が明示されない点と物の怪にならない点、一見無関係であるかのようなこの二つの疑問は、実はその根底において密接に繋がっており、それを明かすことが葵上の造型に迫る一つの方法であるように思われる。以下はそれについての考察である。

二

既に冒頭①の引用文に示したように、源氏と葵上との出会いは首巻桐壺であるが、そこではわずかに「似げなく恥づかし」という心の声が描かれるだけで、彼女の姿はあまりにも少ない。さらに、次に彼女の声が聞かれるのは何と第五巻若紫で、「癪病」を癒した源氏が北山から帰つてくる場面まで待たねばならないのである。

⑦ 女君、例の、這ひ隠れてとみにも出でたまはぬを、大臣切に聞こえたまひて、からうじて渡りたまへり。ただ、絵に描きたるものの姫君のやうにしすゑられて、うちみじろきたまふこともかたく、うるはしうてものしたまへば、思ふこともうちかすめ、山路の物語をも聞こえむ、言ふかひありてをかしううち答へたまはばこそあはれならめ、世には心もとけず、うとく恥づかしきものに思して、年の重なるに添へて、御心

の隔てもまさるを、いと苦しく思はずに、「時々世の常なる御気色を見ばや。たへがたうわづらひはべりしをも、いかがとだに問ひたまはぬこそ、めづらしからぬことなれど、なほ恨めしう」と聞こえたまふ。からうじて、「問はぬはつきものにやあらん」と、後目に見おこせたまへるまみ、いと恥づかしげに、気高うつくしげなる御容貌なり。「(源氏ノ言葉省略)とて、夜の御座に入りたまひぬ。女君、ふとも入りたまはず、聞こえわづらひたまひて、うち嘆きて臥したまへるも、なま心づきなきにやあらむ、ねぶたげにもてなして、とかう世を思し乱ること多かり。

(二二四―五頁)

これとて、聞けるのはわずかに一言、しかも古歌を引用したらしい「問はぬはつきものにやあらん」だけなのだが、問題は、たとえこの程度でも葵上の姿が描かれるのに何故四巻もの巻数を要したかである。と言うのは、これは最初に掲げた年齢の描かれ方と通ずるところがあるからである。しかし、この場合は若干それとは異なるのは、葵上の気持ちかもしれないものが描かれるのは、厳密に言えばこの間にも存在するということだ。但しそれは、「葵上の気持ちかもしれない」という微妙な言い回しを使ったように、例えば次のような聊か問題を孕む形である。

⑧長雨晴れ間なきころ、内裏の御物忌さしつづきて、いとど長居さぶらひたまふを、大殿にはおほつかなく恨めしく思はれど、よろづの御よそひ何くれとめづらしきさまに調じ出でたまひつつ、御むすこの君たち、ただこの御宿直所の宮仕を

つとめたまふ。

(三三頁)

引用部分は有名な帚木巻の雨夜の品定め発端であるから、場面についてはこれ以上の説明は不要と思われるが、何が問題であるかも自ずと明らかであろう。これだけでは、「おほつかなく恨めしく」思っている主体が葵上なのかその父・左大臣なのか判然としないということなのだ。しかし、葵上の場合はこの傾向はままたつて、と言うか、はっきり言つてしまえば引用文①と②の間は皆そうなので、敢えて勘定には入れなかつたというのが真相なのである。換言すれば、葵上の思いと左大臣家の意向は、ほとんど全て一致していることになるが、彼女のこうした傾向は既にその呼称自体が雄弁に語っているとも言える。と言うのは、他に適当なものが無いので本稿でもこの女人を指し示すのに「葵上」という呼称を用いているが、この呼称は後世に考え出されたもので本文中には何処にも無く、物語中で最も一般的な彼女の呼称は「大殿の君」というものだからである。「大殿の君」すなわち左大臣家の姫君ということで、彼女は何処まで言つても左大臣家の一員である軀からは逃れられないのであるが、だからと言って、それだけで彼女のすべてが説明できるものでもあるまい。何故なら、それだけでは前節に掲げた二つの疑問、特に左大臣とは全く関係無さそうな後者は手つかずのまま残つてしまふし、②、⑦といったごくわずかな例とは言え、彼女独自の部分も見られるからである。

これらに説明を加えるためには、たった一言とは言え彼女が初

めて言葉が発したという意味で、①より彼女を实体として捉え得る⑦の場面から分析するしかないであろう。そこで次節では、その中の疑問点を指摘するところから話を始めてみたい。

三

前節でも述べたように、引用文⑦は、葵上の初出である①から数えてほぼ二箇所目、実体的という点ではほとんど最初の場面であるにも拘らず、奇妙な言葉が用いられている。「例の」という語がそれである。これによれば、せつかく源氏がたまに訪ねて来ても、葵上がなかなか会おうとしなかったことが既に恒常化していたことになるが、源氏が葵上を避けているという記述はあっても、その逆のことはこれ以前には描かれていなかった。勿論これもこれがこの物語の常套なのだという考え方はできる訳だが、それでは先程と同じ問いが出ることになる。すなわち、では何故それがここで語られねばならないかである。そう思つてなお引用文を読み進むと、さらに疑問点が湧いてくる。それは源氏の言葉の中にある、「たへがたうわづらひはべりしをも、いかごとだに問ひたまはぬこそ、めづらしからぬことなれど」という部分である。

無論これは、先程挙げた地の文の「例の」という言葉を敷衍しているにすぎないのだけれど、源氏がやや年上の女性と結婚し、彼女はそれを聊か恥じているという情報以外は、葵上の素振りについて、これ以前には何ら予備知識を与えられていない読者としては、これだけ畳み掛けられては、まるでこのような態度を取っ

ているのだから、葵上は源氏に嫌われても仕方ないのだと思ひ込まされているようなものではないか。⁵⁾つまり、葵上は六条御息所と同様、物語に本格的に登場した時点で既に源氏との間が破局を迎えていたと語られていることになる。では何故その語られねばならないかに思いを致す時、どうしても氣に掛つて来るのは、これが若紫巻にあるという、事実なのである。

一口に若紫巻と言っても、その内容は豊富で、藤壺と源氏の、二度目ではあるけれども物語中では最初の密通描写まである訳だが、何と言つてもその巻名から連想するのは後の紫上であろう。だとすれば、先程の事実も或いは紫上と何らかの関わりを有しているのではないかという可能性が浮かび上がってくる。⁶⁾現に引用文②にも、やはり紫上が二条院に引き取られたことを聞き、面白くなく思つている葵上の姿が描かれていた。或いは、次に掲げる文章など葵上の造型を典型的に表していると思うが、その中にもこの条件は同じく含まれているのである。

⑨かうやうに(源氏ガ紫上ニヨツテ)とどめられたまふをりりなども多かるを、おのずから漏り聞く人、大殿に聞こえければ、「誰ならむ。いとめざましきことにもあるかな。今までもその人も聞こえず、さやうにまつはし戯れなどすらんは、あてやかに心にくき人にはあらじ。内裏わたりなどにてはかなく見たまひけむ人をものめかしたまひて、人や咎めむと隠したまふなり。心なげにいはけて聞こゆるは」など、さぶらふ人々も聞こえあへり。

内裏にも、かかる人ありと聞こしめして、「いとほしく大

臣の思ひ嘆かるなることもげに。(以下略)

(紅葉賀・一八一―二頁)

これが葵上の造型を典型的に表しているという所以は、引用文の大半を占める会話文は結局葵上の思いではなくその女房のものということになつてゐるのだが、この物語でも少なくとも正編は女房とその女主人は一心同体のように描かれてゐるから、葵上のものと解しても良からうし、続いて引いた桐壺帝の言葉の中では、それが左大臣の思いとして語られてゐる、すなわち葵上の思いイコール左大臣家の総意という図式が良く成り立つてゐると思つてゐるが、冒頭に見られるように、そのきつかけはやはり葵上のなのである。さらに言つてしまえば、引用文⑧のように、葵上の思いであるか左大臣家の総意であるか判別不能の心中思惟を除いて、葵上の心中が語られる場面は、葵上の登場する巻、それもその登場の前後とはば限定が可能なのである。

しかし、このようなことを言つと、それでは最初の桐壺巻はどうなのかという疑問が出るかもしれない、確かに、そこには紫上は登場しないけれども、その代わりと言うかそつちが本体なのだが、「紫のゆかり」である藤壺が登場する。しかも、桐壺巻の末尾近くには次のようであつた。

⑩源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心やすく里住みもえしたまはず。心の中には、ただ、藤壺の御ありさまをたくひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見ぬ、似る人なくもおはしけるかな、大殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きは

どの心ひとつにかかりて、いと苦しきまでおはしける。

(二八頁)

見て分かるように、葵上は藤壺の完全な引き立て役である。その上、文中にある「さやうならむ人」が発展したのが紫上であることは明らかで、だとすると、確かに桐壺巻にはまだ紫上は登場していないが、藤壺を媒介として、葵上は早くもその間接的な引き立て役に回つてゐるとも言えるのである。

このように見て来ると、葵上は常に紫上と対比され、その引き立て役となるよう求められ、その邪魔をしないよう造型されてゐると理解できるのである。そして、そのように解してこそ、これまで提出した、葵上は何故、実質二度目の描写と思われる⑦で既に源氏との仲が絶望的であるとされるのか、或いはまた、②に至つてより詳細な設定がなされるのかという問いに、全て合理的に答え得ると思つるのである。言うまでもなく、紫上との関係が始まるのが⑦の若紫巻で、そこで二条院に引き取られた紫上が、次第に源氏の心中で重い比重を占め出すのが②の紅葉賀巻だからである。そこでそれぞれ、源氏と葵上との関係は紫上との障害には成り得ないこと、或いは、葵上はこのような性格だから源氏に嫌われても仕方がないことを読者に信じ込ませるのは、極めて有効な方法だと思われる。さらに言えば、源氏が紫上と新枕を交わすのは、葵巻で葵上の四十九日を済ませた直後のことであつた。

特に、この新枕が四十九日の直後というのは意味深長で、この葵巻で葵上はまるで最後の花道とばかりに、懐妊により源氏との愛が目覚めつつあることが繰り返して描写されるのであるが、その

一方で、既に指摘されているように、実に早い段階からその死が匂わされている節がある。すなわち、葵上が物の怪に苦しめられていることが最初に語られる、次のような描写の中にある傍線部がそれである。

⑪院よりも御とぶらひ隙なく、御祈禱のことまで思しよらせたまふさまのかたじけなきにつけても、いとど惜しげなる人の御身なり。世の中あまねく惜しみきこゆるを聞きたまふにも、御息所はただならず思さる。

(二二〇頁)

つまりこれも、この巻で度々繰り返されているように、正妻である葵上に子供が生まれれば、それで全てが決まってしまう可能性がある。それ故そこに紫上を割り込ませるには、どうしても葵上は物語から退場せねばならぬ。それも、紫上のもう一人の大きな障害である六条御息所とともに、ということなのである。

さて、今、「六条御息所とともに」といふ言い方をしたが、まさしく葵上と御息所は類似すると言える。そして、そのこともまた葵上と紫上との繋がりを証する一助となるので、次節ではそれについて少し触れてみよう。

四

葵上と六条御息所が似ているなどという点、意外に思う向きもあるかもしれないが、冷静に考えてみると、この二人には数多くの共通点がある。まず、二人とも大臣の娘であること、そのせいで気位高きはあるが、源氏に対しては年齢のコンプレックスを抱

いていること、一方はそうはならず、またもう一方はそうなつてすぐに死に運れたという相違はあるが、共に東宮と関係があること、源氏との実質的な関係が始まった時点で既にその仲は絶望的と語られるにも拘らず、共に一子を残し、その子達はそれぞれ源氏の榮華を形成するのに寄与していることなど、数え挙げていけば切りがないが、端的にはこの二人が原因で、源氏は桐壺帝の勘気を蒙っていることが挙げられる。尤も、葵上に関してのものは、既に⑨にその冒頭を引用してしまつたが、まだ続きはあるし、全体を六条御息所に関するものと比較したい気持ちもあるので、桐壺帝の言葉以降をもう一度次に並べて掲げてみよう。

⑫内裏にも、かかる人ありと聞こしめして、「いとほしく大臣の思ひ嘆かなることも、げに。ものげなかりしほどを、おほなおほなかくものしたる心を、さばかりのことたどらぬほどにはあらじを、なか情なくはもてなすなるらん」とのたまはすれど、かしこまりたるさまにて、御答へも聞こえたまはねば、心ゆかぬなめりといとほしく思しめす。「さるは、すさずさしううち乱れて、この見ゆる女房にまれ、またこなたかなたの人々など、なべてならずなども見え聞こえざめるを、いかなるもの隅に隠れ歩いて、かく人にも恨みらるらむ」とのたまはず。

(紅葉賀・一八二頁)

⑬院にも、かかることなむと聞こしめして、「故宮のいとやむごとなく思し、時めかしたまひしものを、軽々しうおしなべたるさまにもてなすなるがいとほしきこと。齋宮ををもこの

皇女たちの列になむ思へば、いづ方につけてもおろかならざらむこそよからめ。心のすさびにまかせてかくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり」など、御気色あしければ、わが御心地にもげにと思ひ知らるれば、かしこまりてさぶらひたまふ。「人のため恥がましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の恨みな負ひそ」とのたまはするにも、けしからぬ心のおほけなさを聞こしめしついたらむ時と恐ろしければ、かしこまりてまかてたまひぬ。

(葵・二〇—二三頁)

こうして並べてみると桐壺帝は始終源氏を怒っているようだが、この二人の女性以外にはあまり見ない。しかも、確かに⑬の末尾は藤壺との密通の罪に怯える源氏の姿へと流れているが、両方とも源氏がただ黙って畏まっているせいか、その姿の描写を挟んで桐壺帝の言葉が二分されていたり、その内容も非常に似通っていたりして、決め手となる固有名詞を隠してしまえば、どちらがどちらのものか俄かには判別しにくいぐらいである。これもやはり二人の造型が極めて近いことを暗示しているよう。では、これが如何なる意味を有するのかということであるが、これもこの物語の常として、答えが一つだけということは無いだろうが、少なくともその解答の一つと成り得るものの手掛かりについては、既に拙稿をものしている。すなわち紫上との関わりである。六条御息所は一面非常に機能的人物で、紫上の影的存在であることはそこで述べたが、それに準じて考えれば、この葵上の場合もそれと同じようなことが言えるのではないかということなのである。少し

てその証拠と思われるのが、前節で示した数々の事象ということになる。

つまり、六条御息所の場合は紫上に代わって障害を強引に排除していくところにその主たる役割があったが、葵上の場合には逆に己の存在を限りなく零に近づける事によってやはり紫上のことを間接的に引き立てる役割を果たしているのではないかということなのである。この二つの役割は本来表裏を為すもので、従ってこの二人は、今普通に考えられているよりも遙かに造型的には近いのであり、その言わば種明かしみたいなものが本節で追い求めてきたことのように思うのだが、だとすればこの二人にはさらに興味深い類似点が浮かび上がってくる。本稿冒頭に掲げた、葵上（そしてそれは六条御息所も同じであるが）は、源氏より年上とされるにも拘らず、最初はその年齢差が明示されないということである。ここに至って漸くその問題を考察する時が来たようだ。

五

第一節でも少し触れたように、源氏と葵上との年齢差が明かされるのは、やはり紫上の重さと大いに関わりがある紅葉賀巻である。だが、この葵上が源氏よりわずかに四歳上というのは、葵上は間違っても紫上と源氏の結び付きを邪魔しないよう造型されているとすると、或いは逆効果になる可能性を秘めている。何故なら、源氏があればど夢中になっている藤壺は、義理の母という設定とは言え、さらに上の五歳差だし、多少特殊な例かもしれないが、秋好中宮など冷泉帝より九つも上である。四歳差など、この

當時では問題にもならないかもしれないのだ。⁽⁹⁾最初に設定がないのだから、この時点で二人の年齢差を何歳とすることも理論的には可能であり、事実①だけを読んだ感じでは葵上はもう少し年上であるような印象があるのだが、何故これほど源氏と近い年齢に葵上を設定したのだろうか。それを解く鍵はやはり六条御息所との類似という点に求められよう。

周知のように六条御息所も、その登場の当初には源氏よりも年上であることが描かれるのみで、その実際の年齢差が七歳であることが明かされるのは、葵巻の次の賢木巻であるが、その記載には疑問があることも早くから指摘されている。それに対する解答も、作者の構想のミスというのまで含めて数多くあるが、やはり後に秋好中宮となる娘との関係からというのが一番妥当なのではなかろうか。すなわち、後に冷泉帝の中宮となる秋好の立場を考慮すれば、冷泉の十歳以上上ということはず考えられず、だとすれば、この時点で冷泉は五歳であるから、そこからまず娘の年が決まり、さらにそれによって御息所の年齢が出るという訳である。仮にこれが正しいとすると、葵上の場合もちょうどそれと同じではなかろうか。

葵巻における葵上の年齢は、源氏より四歳上という設定で二十六歳。倉本一宏氏の統計によれば、醍醐朝から後朱雀朝までの初産年齢が分かる者の平均は二一・四歳⁽¹⁰⁾だそうであるが、最高はどのくらいか。この物語の作者・紫式部自身が晩婚のため、通説に従って彼女が天延元年生まれとすると、その第一子・賢子出産はほぼ二十八歳⁽¹¹⁾くらいの時となる。ただ、これは通説に従った

からで、最も早い今井源衛氏の天祿元年生まれ説を採れば彼女は三十歳の時となり、現に氏の御著書ではそういうことになっている。⁽¹²⁾すなわち、彼女自身の年齢は所詮推定によらねばならないので当てには出来ないとなると、道長の三女・威子の二十七歳という辺りが確認できる最高ということになるか。いずれにせよ、当時の結婚年齢・医療技術などに鑑みて、三十歳にあまり近いと難しかろう。すると、葵上のこの年齢は、源氏の表向きの長男・夕霧を産むという設定においては、ほぼぎりぎりの線だと思われる。逆に言って、だからこそ、この点については葵上を脅かすかもしれないという危険を犯しても、源氏と葵上を四歳差に留めざるを得なかったのではないかと思うのである。⁽¹³⁾それでは、それほどの無理を犯してまで、何故葵上に子供を産ませなければならなかったかが最後の疑問となるが、それについては節を改めて考察を加えてみよう。

六

以上のように、葵上は常に葵上の引き立て役に回り、間違っても源氏と葵上との結び付きを邪魔しない存在として造型されていると思われることを確認してきたが、初步的な疑問として、それならば何故そもそも葵上というものを設定したかということが浮び上がってくる。その存在が最初から無ければ、本稿で考察してきたようなややこしい手続きなど、一切不要だからである。だが、光源氏にとって葵上がいらないことなど考えられない。しつこいようだが、もう一度①に戻ってみよう。

源氏と葵上との結び付きは疑いもなく政略結婚であった。これは愛情を第一とする現代においては軽蔑されることかもしれないが、生まれた時から右大臣家を敵に回してしまつた光源氏にとつて、その政敵である左大臣家と結び付く以外あの時代において生きていく道が何処にあつた¹⁵だろう。すなわち源氏は左大臣の娘・葵上と一度は結ばねばならなかつた。しかし、その存在がいつまでもあつたのでは葵上が割り込む隙がない。かと言つて、離婚させたのではその後左大臣家と角が立つから、源氏に惜しませつつ死なすしかない。ここまで書いてくれば、何故葵上が最後に夕霧を産むかは既に明らかだろう。勿論そのまま葵上を死なせたのでは源氏と左大臣家の繋がりが完全に断たれてしまうからで、それ故葵上は自分が消え去る時、新たな源氏と左大臣との絆で、しかも絶対に葵上の存在を脅かさない、源氏との間の子を残していく必要があつた訳である。大体葵巻で葵上の懐妊・出産という言葉（葵・二〇三頁）を俟つまでもなく、かなり不自然なことである。おそらくこの年月は葵上の成長を待つていたためであらう。そしてその子が女であれば、今度は逆に左大臣の持ち駒を増やしてしまふことになる。だから夕霧は男なのである。これはまた、子供を産めない定めにある葵上¹⁶を間接的に助ける意味もあつた。何故なら、いつまでも生きている、例えば花散里あたりに産ませたとしたら、これもまた葵上の地位を脅かす可能性があるからである。すなわち葵上は源氏の子を産んだ直後に死なねばならなかつたのである。葵上にとつてのもう一人の脅威である六条御息所を連れ

て。従つて、葵巻の物の怪事件とは、どちらかが一方的に加害者なのではなく、また被害者でもないという、言わば相乗効果的事件であつたと思われるのだが、その一翼を担うことが葵上に課せられた最大の使命だつた訳である。そして彼女はそれを立派に全うした。それ故、彼女はその後、絶えて物語に登場しないのであろう。

こう言つてしまうと、大朝雄二氏の「葵の上の役割は光源氏的世界が本当に自立するまでのつなぎにすぎなかつた」（傍点大朝氏）という言葉を、別な形でなぞつたことになるかもしれないが、量の多い分だけより詳細な点にまで及べたはずである。換言すれば、夕霧を産んで死ぬのは左大臣の娘であれば誰でも良かったのであり、葵上とは極めて機能的な存在であつた。そしてそれが固有の名前を持たない理由ともなつていふところである。

注 1) 藤村深「花宴のあと」（源氏物語の構造 第二 赤尾照文堂 昭46）。

(2) 阿部好臣「物の怪誕生——柏木の位相へ」（語文）第八十八輯 日本大学国文学会 平6・3）にも同様の見解が示されている。

(3) これはまだ、あくまで予感に留まるが、この他にも桐壺院・柏木・宇治八宮などの名前を挙げる事が可能であり、少なくともこの物語の主要な人物に関しては言えると思う。大きな問題は桐壺更衣・宇治大君くらいだと思ふが、彼女達はその存在が不在だからこそ、いわゆる「形代」の論理が呼び込まれて来るのであり、例外とするには当たらない。聊か妙な物言いをすれば、彼女達の物の怪が実体化したのが「形代」だと思ふからである。

(4) 吉井美弥子「葵の上の「政治性」とその意義」(森一郎編著「源氏物語作中人物論集——付・源氏物語作中人物論・主要論文目録——」勉誠社 平5)

(5) 加納重文「源氏物語の研究」第二編 人物論 第二章 葵上(望稜舎 昭61)にも同様な指摘がある。

(6) 注(5) 及び室伏信助「葵の上」(國文學) 學燈社 平3・5)にもその示唆はある。

(7) 小学館・完訳日本の古典「源氏物語」二一〇七頁注三一。

(8) 拙稿「六条御息所の機能——紫上との関わりをめぐって——」(日本文学) 日本文学協会 平元・11。

(9) 現に、この物語の中でも鬚黒北の方をめぐって、「年のほど三つ四つが年上は、ことなるかたはにもあらぬを」(藤袴・六二四頁)という言い回しが見られる。

(10) 大朝雄二「源氏物語正篇の研究」第十二章 葵巻における長篇構造(桜楓社 昭50)。なお、それに対して藤村潔氏は、「源氏物語の構想に関する試論」、「前坊の姫君考」(共に「源氏物語の構造 第二」に収録)で逆に六条御息所の年齢が決定してから娘の年齢が決められたとされるが、それは氏の御論の前提である十年単位説を認めてからの話となるので、今のところ判断は保留しておく。

(11) 倉本一宏「『栄華物語』における「後見」について」(山中裕編「栄華物語研究」第二集 高科書店 昭63)。

(12) 岡一男「増訂 源氏物語の基礎的研究」(東京堂出版 昭41)。

(13) 今井源衛「紫式部」(吉川弘文館 昭60(新装版))。

(14) 他に、葵上の年齢設定については、二十五歳の厄年で死なせるはずだったのが、源氏二十歳の時に予定していた空白を一年ずらしただめにこうなったという説を、注(1)の論文で藤村潔氏が説かれているが、これも十年単位説を前提として認めなければならぬ。但し、葵上の準拠が中宮定子かもしれないという部分には賛同する。

(15) 森一郎氏は「桐壺帝の決断」(「源氏物語の方法」 桜楓社 昭55)で、この桐壺帝の決断は「右大臣家への反抗という対立の種をまき、源氏をその渦中にまきこむ」という点では「錯誤」であったと言えるが、それが後の源氏須磨論を呼び込むためには必然であったとされる。その通りであろう。加納重文氏も注(5)の論文で「おっしゃられているように、所詮この選択は「左大臣側の事情によってではなく、主人公光源氏の事情によって」決められていくのである。」

(16) 拙稿「紫上造型考——子供を与えられなかった意味——」(「中古文学論攷」第三号 早稲田大学中国文学研究会 昭57・10)。

(17) 大朝雄二「葵の上」(秋山虔・編「源氏物語必携Ⅱ」 學燈社 昭57)。

(一九九四年七月十四日成稿)